

『硝子の壁』の顛末」その後*

菊地 勝弘**

「中谷先生が書かれた『硝子の壁』の顛末」(菊地, 2002)が印刷されてから暫く経って、その中でも引用させていただいた名古屋大学名誉教授の樋口敬二氏からの手紙(2002年7月15日付)を受け取った。先の報告で、私は『硝子の壁』問答は取りあえずこれで終止符を打つことにしよう、と書いたのだが、樋口氏の手紙は、流石に中谷先生最後のお弟子さんであるだけに、成る程という含蓄の深い内容の濃いものだった。それを私一人のものとしておくよりは、「ものの見方、考え方に貴重な示唆を与えるもの」と考えられたので以下に紹介したい。

さて、『硝子の壁』のこと。

君のいうとおり、科学と芸術との「共通性」を示す言葉であると思いますが、逆に、「壁」という点に着目すると、別の意味とも考えられます。

例えば、雪の結晶、これは「美しい・・・」、この点では、科学者も芸術家も同じ感覚によるのですが、芸術の側からは、「硝子の壁」があるから一つの側からしか見られない。しかし、科学者は、これをあらゆる角度から見る事が出来る。これが、「科学者の眼」でしょう。そこに、科学と芸術の違いがあるのだ、という意味にも考えられます。

しかし、同じように、「壁」があるので、科学者はものを「芸術家の眼」で、あらゆる角度から見る立場に身を置けない、という訳です。つまり、君のいう(「顛末」のP.427, 左上9行~12行)「共通のものだ」という表現で表したのだ、ともいえる訳です。このように考えると、中谷先生が、君の『寺田寅彦の追想』(中谷, 1947)に、「硝子の壁」の言葉を書かれたのは、案外、中谷先生の心に潜む科学者としての誇りと限界に対する嘆きの気持ちを表したのかもしれない。

というのは、文学側から言うと、「寅彦の書くものは

文学だが、宇吉郎の書くものは、文学の域に達していない」という批評があるからです。寅彦は、『柿の種』(寺田, 1933)の冒頭に、

「日常生活の世界と詩歌の世界の境界は、ただ1枚のガラス板で仕切られている。

このガラスは、初めから曇っていることもある。

生活の世界のちりによごれて曇っていることもある。

二つの世界の間の通路としては、通例、ただ小さな狭い穴が一つ明いているだけである。

しかし、始終二つの世界に出入していると、この穴はだんだん大きくなる。

しかしまた、この穴は、しばらく出入しないでいると、自然にだんだん狭くなって来る。」

と書いたように、「ガラスの板の穴」を通して、科学と芸術の二つの世界に出入りできたのに対して、中谷先生は、「寺田先生には及ばないなア」と嘆きと尊敬をこめて『追想』にこの言葉を書かれたのかもしれませんが。

しかし、又、別の見方からいえば、科学者の中には、「壁」が「ガラス」ではなく、「板」であるために、自然現象の美しさという芸術性の喜びをしらない人もいます。それに比べて、雪の結晶という美しさを知っている自分の喜び、—それは、その学統を継いで行く君に伝えたい気持ち—をこめた言葉であるのでしょうか。

そして、君はその期待に答えて十八花とか、御幣型とか、新しい“美”を見つけていったわけであり、まさに、この言葉にこめた期待に応えたことになります。

しかし、逆に、「科学と芸術との間には硝子の壁がある」という言葉を甘く考えてはいけないうい面もあります。特に、科学者ではない人が、これを広く解釈すると、とんでもないことになることを、2001年1月に東京での「科学の心と芸術<中谷宇吉郎：一人の科学者>展」の行事で感じました。まさにこの言葉をタイトルにした、「科学と芸術との間には硝子の壁がある」という対話では、「硝子の壁」どころか「石の壁」

* Since after “The Circumstances of a Phrase written by Prof. Nakaya”.

** Katsuhiko KIKUCHI, 秋田県立大学生物資源科学部. kikuchi_snow@akita-pu.ac.jp

がそびえていると感じました。

したがって、この言葉がひとり歩きして、科学者、芸術家が互いに「硝子」で、「見る」ことができるという錯覚を起こしては困るという“危険な言葉”とも言えます。

その点、寅彦がやはり、偉いと思うのは、『柿の種』の冒頭に書いたように、「ガラスは初めから曇っていることもある」、「ちりによごれて曇っていることもある」ということを、よく知っていたことでしょう。そこに、寅彦は科学者であるとともに、芸術家であり得た所以があるのでしょう。それに、僕も君も「硝子」であるといえるほど芸術の世界に接してはいないのではないのでしょうか。つまり、「硝子」といえたのは、宇吉郎だからであり、いかえると、宇吉郎もまた寅彦と同じように、芸術の世界に住む人たちと深い交流があったからこそ、「硝子」といえたのでしょう。

「硝子は曇る」、これが、この言葉への注釈として必要であり、その点で、私は、寅彦の『柿の種』の言葉

の方が好きです。

しかし、君の「顛末」のような文章が学会の機関誌「天気」に載るのも、「硝子の曇り」が、うすれてきたことを示しているとも解釈され、ご同慶の至りです。

2003年7月、札幌で開催される第23回国際測地学地球物理学連合(IUGG)総会で「Nakaya(中谷)-Magono(孫野)記念セッション」があるのは嬉しいことです。

手紙は以上だが、思うに、ともすれば、ものの見方、考え方に、とかく上辺だけに陥りやすい昨今の風潮に思いを巡らせ、何かの機会に一寸考える縁になればと感じ投稿した次第である。

参考文献

菊地勝弘, 2002: 中谷先生が書かれた「硝子の壁」の顛末, 天気, 49, 423-427.

中谷宇吉郎, 1947: 『寺田寅彦の追想』, 甲文社, 319pp.

寺田寅彦, 1933: 『柿の種』, 小山書店, 224pp.



熱帯降雨観測衛星 (TRMM) の研究公募について

宇宙開発事業団では、1997年11月27日に打ち上げられた熱帯降雨観測衛星 TRMM に関する研究公募 RA (Research Announcement) を行い、TRMM 衛星データを用いた研究を、国内外の個人あるいは団体を対象に広く募集します。TRMM はこれまでの約6年間で大気/降水現象や気候学研究に有用なデータを蓄積してきました。このようなデータを積極的に用いた創造的かつ建設的な研究の応募を期待します。

1. TRMM 概要

TRMM (Tropical Rainfall Measuring Mission) は世界で初めて人工衛星からの降雨観測を行う衛星です。TRMM では熱帯域の降雨を定量的に把握することにより、エネルギー・水循環の解明と、大気大循環に与える影響を明らかにすると共に、気候変動の予測、異常気象、自然災害の予防などを目的としています。搭載するセンサは、降雨観測レーダ(PR)、TRMM マイクロ波観測装置(TMI)、可視赤外観測装置(VIRS)、

雲及び地球放射エネルギー観測装置(CERES)、雷観測装置(LIS)の5つです。

2. 応募要項

今回のRAの募集要項は、地球観測利用研究センター(EORC)のTRMMホームページに掲載します。下記URLをご参照ください。

http://www.eorc.nasda.go.jp/TRMM/index_j.htm

3. お問い合わせ先

〒104-6023 東京都中央区晴海1-8-10

晴海アイランドトリトンスクエア

オフィスタワーX棟23階

宇宙開発事業団地球観測利用研究センター

TRMM RA事務局 山根憲幸

Tel: 03-6221-9017, Fax: 03-6221-9191

e-mail: trmmcont@eorc.nasda.go.jp